

私と文学・07
女の一生

旅行に行くときはいつも文庫本を何冊か持っていくことにしている。電車の中や飛行機の中など閉ざされた空間なら読書が進む。何の本を持っていくか、それを選ぶのも旅の楽しみの一つである。普段は話題の本ばかり追いかけているが、数冊しか選択肢がない旅行中なら、なかなか手を付けられずにいた本にもトライできる。今回はモーパッサンの『女の一生』を入れた。光文社で近年出している古典新訳文庫。字も大きいし、訳も現代風で読みやすい。

主人公のジャンヌは、父親の（女の子は無垢に育てる）という昔ながらの意向のもとに修道院に預けられる。17歳の時に修道院をでて家に帰るときのジャンヌは、喜びに溢れこれから素晴らしい人生が待っていると胸をときめかせる。庭の

友の会会員募集

現在、令和6年度の会員受付中です。まだ更新をされていない方の更新登録を待ちしています。

友の会では常時会員を募集しています。友人や知人に参加を呼び掛け、会員の輪を広げましょう。入会についてお問い合わせは、友の会事務局まで。

木も鳥もみな彼女を祝福しているように美しい。そして運命の人と出会うことを夢想するジャンヌはすぐにジュリアン子爵と結婚する。しかしその結婚生活は思い描いていたようなものとは程遠い。吝嗇で家庭を顧みず、浮気を繰り返す、子供にも愛情を注がない。もはや庭の自然も彼女の眼には美しいものとして映らない。唯一の希望だった息子のポールは学校を勝手に退学し、母親に金を無心し続ける。そして小説の最後の乳姉妹のロザリ

の言葉が印象的である。「ねえ、ジャンヌ様、人生つてのは、皆が思うほど良いものでも、悪いものでもないんですよ」

名作の底力を感じた一冊だった。
(星 佐都子)

「私と文学」の原稿募集

約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

「文友の部屋」の原稿募集

1500字程度で、会員のみなさまの声を寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。インシヤルでの投稿も可です。



文学の杜
仙台文学館
友の会会報

第74号
令和6年3月25日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話 022(271)3020
仙台文学館のホームページ
https://www.sendai-lit.jp/

新年度は 特別展「詩人・石川善助」でスタート



石川善助
(1901～1932)

2024年度展示 秋は「文豪、仙台ニ立ち寄ル」

仙台文学館は今春、開館25周年を迎えます。記念となる春の特別展では、仙台の詩人・石川善助をご紹介します。1901年に仙台の国分町に生まれた善助は、仙台商業学校在学中から詩作に目覚め、『日本詩人』をはじめとする中央の詩誌に作品を発表するなどし、将来を嘱望されましたが、1932年、31歳で不慮の事故により命を落としました。宮城県出身の詩人として、尾形龜之助と並び称されてきた善助ですが、生前に一冊の詩集を出すこともかなわず、これまでその創作活動の全容は知られてきませんでした。本展では、書籍・原稿・書簡・創作ノート・作品掲載誌など、現在残されている膨大な石川善助関係の資料の全貌を紹介するとともに、日本近代詩史にお

ける善助の位置づけを明らかにし、その詩の魅力を探ります。またスズキヘキヤや天江富弥をはじめ、草野心平や宮沢賢治など、様々な人々との交友も取り上げます。夏休みの「こども文学館えほんのひろば」では、絵本・紙芝居作家の長野ヒデ子さんの原画展を開催します。「おかあさんがおかあさんになった日」「せとうちたいこさん」シリーズなど、代表作の原画を中心にご紹介します。会期中は「絵本の部屋」を開室し、「お話会」を行うほか、長らく休止していた「手作りコーナー」を再開します。



作・長野ヒデ子
童心社

近代以前から多くの人が行き交う場所だった仙台には、後に文壇で活躍した文学者たちが学業や仕事などで訪れていました。秋の特別展では、その内の7人、島崎藤村・岩野泡鳴・正岡子規・高浜虚子、河東碧梧桐、宮沢賢治、太宰治を取り上げ、彼らと仙台とのかわりや、交流のあった宮城の文学者をご紹介します。今回は文学館にあまり馴染みのない方々にも楽しんでいただけるように、文学を題材にした人気ゲーム「文豪とアルケミスト」コラボレーションし、キャラクターパネルの設置、コラボグッズの販売などを行います。

- 仙台文学館2024年度展示予定
- ◆仙台文学館開館25周年記念特別展「詩人・石川善助をたずねて」 北方への道のり」
4月27日(土)～6月30日(日)
 - ◆夏休みこども文学館えほんのひろば「せとうちたいこさん」にあいたーい！長野ヒデ子 絵本と紙芝居」
7月20日(土)～9月8日(日)
 - ◆特別展「文豪、仙台ニ立ち寄ル」
10月5日(土)～12月15日(日)
 - ◆新春ロビー展「100万人の年賀状展」
1月12日(日)～2月11日(火・祝)
 - ◆企画展「大沼英樹写真展(仮称)」
1月25日(土)～3月23日(日)
- *タイトル、会期は予定です

風と歩こう

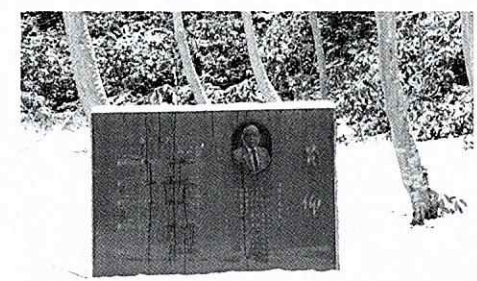


Photo by Ryuji Sasaki

文学館の一階玄関を出て、水の流れて囲まれた丸い石舞台を越えると、宮城の音楽教育に尽力された、海鋒義美先生の音楽碑がある。通ったときは、決まって石碑に刻まれた温顔を見つめてしまう。数十年前、一度だけ海鋒先生の近くに座ったことがあった。地域のママさんコーラスに入っていて、毎年開催される合唱祭の理事の役が回ってきて運営に関わったときだ。後日慰労会があり関係者が十人余り松島の和食処に集まった。男性は海鋒先生ひとり。何度も理事を経験しているベテランの代表は、海鋒先生ともしっかり打ち解けた話しぶり、新米の私はその様子に目を見張った。海鋒先生はよしよしという風に頷いて、包みこむような温かい視線を皆に注いでおられた。

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第74号をお届けします。
▽食いしん坊の私は和食展を東京会場で見たいと思った。巡回で7月から東北歴史博物館にくるとはわかってはいたが、展示内容が一部異なる出ていたものだから。和食がユネスコ無形文化遺産になってから10年がたった。2020年の展覧会が3年延びた。食に関心がある方には面白いのでぜひ見てほしい。(一)
▽私達が地震大国に暮らすことを再認識した。まさかの元日の能登半島地震、直後の火災に加え交通網は寸断され支援が届かず、厳寒の中で耐える被災者の姿に、13年前の記憶が甦った。けれど不思議な見方かもしれないが、私は報道陣に心えお年寄りが、上品な歳のとおり方をしている被災者を嘆く話も穏やかなことに内心感動した。地域の交流があり孤独でないこと、雅な九谷焼や輪島塗を産んだ加賀百万石のDNA。だるるか等と考えた。(二)
▽先日初めて川越に行った。今後度々行くことになりそうだ。そこで、自由時間を使って探索に出かけた。ナビに目的地を設定、赤信号で止まる度に周囲を眺めた。音声案内が、川越が城下町だったことを思い出させてくれた。ループルのようなバスがあるらしい。次回はバスでゆつくり町並みを探索しよう。(和)
▽六華亭遊花さんは、淡い着物に黒い羽織姿で現れた。会場に作られた緋もうせんの演台に上ると、につこりと一笑。岩手県遠野市出身の落語家は東北弁を丸出しに、笑いの虫をこれでもかとくすぐる。文学館で行われた古典芸能講座は、福を呼ぶ催しだった。(佐)

文友一滴

東八番町、新寺小路の生協の裏を通ることが増えた。そこに小さな神社がある。隣は何とか教会、こちらももちんまりとしている。通る度にその組み合わせと付まいが気になっていた。寒さが膝に伝わる季節なので、パソコンで検索し、周辺の地図散歩してみた。神社は四社宮といひ、伊達政宗に従って大阪の陣で戦った大河原出身の鉄砲足軽たちが、出身地の神社を勧請して建てたという神社だった。さらに、ローマ渡航を前に、支倉常長が航路の安全を願って賽銭箱を奉納したとも伝えられている。常長が書いた賽銭箱の表板が今も社殿にあるそうだ。周りをアパートやビルに囲まれた小さな神社にそんな歴史があったことを少しも知らなかった。
地図散歩で気付いたことがある。愛宕上杉通り、仙石線、宮城の萩大通り、広瀬川に囲まれた地域にたくさん小さな小さな神社があるのだ。空襲の影響がなかった地域というのが理由の一つではあるだろう。でも、それだけなのだろうか。
仙台駅東側の多くの地域は空襲の影響を受けていない。例えば、宮町周辺も火災にあってはいない。宮町の東は江戸時代は田圃地帯だった。そして明治27年から昭和33年までは花街だった。人々の営みが確かにあった地域だ。それなのに、地図上では、今そこは神社の過疎地帯なのだ。一方、空襲の被害が大きかった東一番町や国分町周辺には小さな神社が残されている。三越の角の金蛇水神社、ヤマハの裏の中野神社はよく知られている。
街の再開発のために、神社をビルの中に移転したという話を聞いたことがある。防災という視点もあるのだろうか。しかし地域と神社の関係も気になるところだ。新しい街とお社、そこではどんな関係が生まれていくのだろうか。(和)

友の会随想

♪赤い花 さいた いい花
さいた てれてれ おてんとさ
ん てれてれ おてんとさん
いい唄うたほ いっしょにうた
ほ てれてれ おてんとさん
てれてれ おてんとさん
ふと口ずさむ歌のひとつ「お
てんとさん
の唄」(野
口雨情作)。天江お
んちゃんやへきおん
ちゃんの顔がうかぶ
(私たちはおんちゃ
んと呼んでいた)。



おんちゃんたちの姿を追いかけて

守っている。
私は宮城県中央児童館(2013年閉
館)の職員として長年子どもの健全育
成に関わってきた。5月5日の子どもの日
に行われていた「おてんとさんまつり」
では、向山の丘に子どもたちの歓声が響
いていたのを思い出す。その中心にはい

つもおんちゃんたちがいた。

児童館内には、おてんとさん関係の資
料室があったので、おんちゃんたちはよく
お出でになっていて、講座の講師をして下
さったり、昼食を共にしたり、飲み会をこ
一緒したりした。ある時「天江おんちゃん
の字はステキですね」と言ったら「私は

ね、竹久夢二さんが好きだったの。絵や
字を一生懸命真似して書いていたの」と。
味のある文字だった。好きになるってこ
ういうことなんだと感心した。その資料
保管を仙台文学館にということになり、
文学館準備室の皆さんがお出でになって
資料をご覧になっていたが、白い手袋をつ

けて丁寧に扱う
姿に、改めて貴
重な資料である
ことを知った。
2022年に
発足から100
年を迎えたおて
んとさんの活動

は休止となったが、多くの資料が文学館
で大切に保管されている。文学館に行く
と必ず常設展を覗き、おんちゃんたちに
会ってくる。私は、退職後「紙芝居文化
の会みやぎ」と称する会で子どもたちと
紙芝居の世界を楽しんできた。おんちゃ
んたちの姿を追いかけて

第61回読書会

人の営み、幸せのとらえ方

原田マハ「冬空のクレーン」

巨大都市開発会社
の開発チームで働く
陣野志保は、部下と
の軋轢から逃れるよ
うに北海道に向か
う。彼女は「東京の
風景を変える」と豪
語し、プロジェクト
を動かす重要な役割
を担っていると自負
していた。しかし、
会社を離れて大自然
の中に身を置き、穏
やかに暮らす人々と
接することで、自分
が何者でもないこと
に気付かされる。
釧路のタンチョウ
ヅル保護区で働くこ
とを選んだという青年も又、夜明けの空
を飛翔する雁の姿の美しさに圧倒され、
東京を離れて来たのだと言う。
*自然の前では細かな事などを忘れてしま
う。
*無駄と思われる時間でもそこからやり
直す気持が生まれた。
*新しい恋が生まれるかと思っただけがそう
ではなく、今迄の生き方を変えることは
難しいものだ。
などの感想と共に、女性が社会の中で活
躍することへの応援の声も聞かれた。
釧路の風景や星空などの情景が、美術を
学んだ作者らしく美しく描写されている。
2月14日5名出席。(佐)

第60回読書会

死は生の一部として

村上春樹「螢」

村上春樹の作品には、死の場面が淡々と表現されることがある。この短編にも友人の自死の場面が出て来る。前日まで、全くその予兆など感じられなかったのに。「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」という作品のキーワードが響く。

いて、好感が持てた。
*作者の持つ死生観がはっきり表れている。
*昔、蚊帳の中に螢を放したこと、その命の儚さを思い出した。
*死というものの形が明確。最後の文章も心に残る。

*夏目漱石の「こころ」に通じるものがあった。
*物語の本質が分かりやすかった。生と死の哲学的意味が示されている。
*文章がすっきりして

次回読書会は4月10日(水)14時
O・ヘンリ「桃源境の短期滞在客」(新潮文庫)
O・ヘンリ短編集(一)所収
※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。

本を片手に 長いお別れ



「長いお別れ」

中島京子

日本人の平均寿命は84・3歳(男性が81・5歳、女性が86・9歳)で世界第1位である。(WHO発表2023年版)

長寿は嬉しいことだが、反面、思いもよらない認知症(認知機能の低下)をもたらしている。本人もさることながら時には面倒を見る家族にまで不幸を及ぼす場合もある。

この小説は元校長先生だった東昇平がものわすれ外来で認知症と診断され、家族が対峙していく様子が書かれている。初めの数年は進行が遅かったが徐々に認知症の度合いが進み、他から見てもわかるようになっていった。身近にいる妻と三人姉妹がそれぞれの事情を抱えながらも親のいる家に寄ってくる。要介護4になつていく父親昇平の行く末を案じみん

なで話す場面がたくさんある。読み初めにこどもとメリーゴランドに乗る東昇平が出てくるのだが、読み進

めていくうちに彼の徘徊だということがわかる。唐突だが有吉佐和子著「恍惚の人」を読んでびっくりしたことを思い出していた。
妻曜子は三人の娘たちにお父さんがいつもとは違う行動をしていると電話する。長女は夫の仕事のためアメリカに住んでいる。帰国して親の面倒を見たいとおもいがなかなか難しい。子どもが二人いる。次女は近くに住んでいて、母親の曜子をなにかと手助けしている。子どもは一人だが後半父親が大変な時期に二人目の身重な体だった。三女は独身で母親には頼りにされるのだがいつも忙し

最後に授業をさぼったアメリカの孫タカシと、タカシの学校の校長先生が面談している。ここの終わり方がいい。
「祖父が死にました。いろんなことを忘れる病気になるって十年間、八十歳で

100万人の年賀状展終了

仙台文学館の1階、エントランスロビーはゆったりと広い。今年、文学館の門松はこのロビーの階段上り口にしつらえられた。シャープな雰囲気を持つ階段と、仙台藩の城下で飾られたという伝統的な仙台南松は、その違いを際立たせつつも良くマッチしてお正月を寿いでいる。

この場所で1月10日から2月12日までの1カ月、恒例の「100万人の年賀状展」が開催された。文学館と文学館友の会の共催事業である。今年テーマ部門と自由部門の約500点が展示された。
「自由部門」は龍と富士山の絵が多く、それがいずれも個性的で、見ていたのしくなる。台原中学校の皆さんからは活気溢れる賀状が沢山届き、会場に華やかさを添えている。のどかな絵と文字が一体となった味のある賀状は、絵手紙グループの方々からのもの。書き手の新年



に込めた想いが伝わってくるようだった。「テーマ部門・仙台文学館と私」に寄せられたものは、三代の館長についてなど、その人と文学館とのつながりが細やかに書かれており、しみじみと味わい深い。近年、年賀状を出す人が減っているという。いやいや、やはり年賀状は心あたたまる新年の必需品なのだ、この展示を見て思った。(佐)